

象墜記

平安浦丹代所歲象墜彫盧生
夢園丹後小島莊山生作生天資工雕
鏡自欲試其手眼之力回造此墜、
表一寸近加五分高如之為樓閣
十有四為八、十人為馬象十二
正為廣一為楹八九楹為禽四五十集
驟視如蟻集腐葉諦視如種、可
辨云清余心之記余聞而不為信且
方按舊著外史未既也乃今齊業不
而觀之生在於廣臨眉領宛然
北邊色露出微南前騎及從旗幟續
紛中擁我與四十六騎之導以樂玉
一大門、扁不老隸字者皮板肉到
門傍百未拜逾陳列玉鞍飾象左有
難樓、門之際高設幔幕列縣、教
鐘門內三殿中者越閣道扉之門樓
其下不穿門人馬往來去者為長生
厦、似王浮圖、香不擁之厦、樓
閣畫畫景後一三閣兩層皆沒燈座
擊珍玩列侍肉控者數百人、閣尤張
筵一伶方舞蘭凌王奮袖相之鼓
者、金兵笛者、華、葉者、環之由
廡下觀者五十餘人、閣右有堂兩階
懸燈屏、姬扶墨持花、近、曲房、
浸園池、位置、楹、石、樓、禽、臥、鹿、房、中
有拂簪了而上樓、書、机、瓶、壺、整、然、有
雅、穴、畫、十、展、書、畫、者、眾、首、評、者、揮
毫、者、立、題、屏、者、捧、硯、侍、女、樓、又、一、層
有、圍、棋、者、傍、觀、者、遊、而、看、書、者、倚
窗、對、話、者、又、一、層、露、臺、西、之、列、盆

①

最甚後稍高、爰置潭、儀、風、年、類
其前、遊、聖、梯、如、虹、蜿、延、而、上、美、人
尊、容、至、景、高、樓、左、右、又、夾、以、露、臺
從、椅、眺、遠、裙、帶、縹、渺、臺、下、構、樓
各、兩、層、相、通、而、以、一、大、樓、臺、之、上、層
之、左、為、詩、筵、几、拾、書、憑、欄、撥、續
而、處、其、下、層、之、左、佳、人、醉、舞、穿、吹
蕭、拍、板、而、右、數、實、彈、琴、飲、酒、如、逃
喧、者、其、間、隔、以、重、欄、置、冊、板、二、盆
下、至、大、樓、則、醉、客、襟、背、杯、盤、狼、藉
沒、桌、三、名、珠、以、椅、詞、飲、掃、戰、行、酒
執、矣、極、老、狀、態、而、樓、下、居、獨、舞
筵、也、由、廡、上、又、有、樓、三、層、直、空、梯
云、拼、左、又、起、三、樓、則、跳、門、內、三、厦
矣、每、樓、有、空、安、每、十、其、佳、擇
有、條、理、如、此、而、宮、眼、斗、拱、插、柱、柱、礎
製、也、各、結、補、必、方、天、必、圓、天、或、雕、龍、若
龍、合、麟、眠、水、皆、備、瓦、際、時、有、朱、雀
去、顧、嗔、噴、一、乳、雀、雜、葉、而、飛、其、項
屑、不、遺、如、此、余、眼、不、能、親、以、誌、健、純、明
既、之、又、極、生、在、側、指、說、稍、得、寫、之
嗟、信、矣、技、之、至、於、此、也、有、空、自、觀、歎
曰、技、難、妙、哉、得、免、無、益、乎、何、必、以、寸
許、物、備、此、種、而、生、生、又、為、之、記、為、余
曰、不、然、余、侯、外、史、後、彼、史、洋、國、某、叙
我、錄、倉、以、未、典、廢、之、其、筆、跡、大
不、得、多、也、然、以、地、球、圖、極、之、亞、細
亞、諸、國、不、能、掌、大、至、於、我、移、以、指、
之、蔽、而、不、見、此、象、墜、至、小、矣、而、數
十、萬、雄、豪、傑、對、千、軍、萬、馬、山、其
骨、河、之、血、以、爭、此、指、大、之、物、當、其、得
志、城、關、連、空、宮、宇、障、日、姬、美、駒

②

11 象墜記

頼山陽

一巻

純本墨書
本紙二〇・一×二五〇・三
文政十年(一八二七)

「象墜」(作品番号10)とともに伝えられてきた頼山陽(一七八〇〜一八三三)による記文である。「象墜記」には、これとは別に「形山生妙於彫刻所造象墜」で始まるものがあり、「頼山陽全書(昭和六年)では、本作を初稿、別文を定稿としている。初稿とされる本作の方が彫刻の細部について詳述している。

拡大鏡で見ても、その全容を捉え難いほど細微な「象墜」を、山陽は形山の解説を受けながら鑑賞し、彫り出された情景を物語っている。「象墜」が制作されて四年後のことである。巻末には山陽が没して七年後に、小石元瑞(一七八四〜一八四九)が天保九年(一八三八)に記した跋文がある。

山陽は『日本外史』『日本樂府』『日本政記』などの史書を著したことで名高く、その史観は幕末の尊皇攘夷派の志士たちに大きな影響を与えた。京都を本拠として、多くの文人と交わり、詩文や書画を数多く遺した。

なお、昭和前期に本作の写本二巻、版本一帖が高松宮家に献上されている。写本のうち一巻は日本美術協会会頭を務めた中田敬義が昭和六年に献上したもので、もとは古河市兵衛が所持し、次代の潤吉より敬義が譲り受けたという。もう一巻は田中光頭が所持していたもので、大正十三年頃に敬義が譲り受け、その後、高松宮家に入ったと考えられる。この二巻の写本は、毎行の文字数に違いはあるが、内容は正本と一致している。ただし、奥書について、田中家伝来本は「文政十年歲在丁亥春。仲廿又五日」とあり、本は「文政十年歲在丁亥秋。仲廿又五日」とある。

版本は「頼翁真蹟象墜帖」として明治三年(一八七〇)に儒学者、加藤桜老(一八一〜一八四)が版行したものである。正本を模刻しているが、跋文の一部に正本と差異がある。昭和十三年に相見香雨より献上された。

從如雲如雨而不過就指大中為之
而後世津談之屑叙之無形山
彫之矣鼎而全候史二十餘年累
三十萬言而不能悉舉形山乃取
寸許物備此其象象固寥寥耳乃
畢其數乃爾亦可以不記也且夫
世人之胸於功名富貴以功名富貴
高且大不能眇視之也五十年物
相其氣籠蓋天下亦不過一夢寐
使此夢也自至人主眼蔽之如蝶集
腐葉耳是之以此曉世矣形山之
雖有浦升子之歲焉烏知其意
之不在於此哉何曰無益不可以不
記也於是乎記

天保十年
歲在丁亥春仲月
又五日山陽外史賴襄撰并書
于鴨河草堂山紫水明處

形山之於刀戲離婁公輸併成一而山陽
形以天下名手為之記叙事精密議論
縱橫實兼韓蘇之長可謂刀與筆實
絕矣宜哉浦井主人寶愛不措也今也朝
逝七年矣又得重寶在舊日刀則不知
此筆法不可後也亦能健獨在筆者
刀者皆得親視則亦既老矣不可以
無題也乃書

天保九年季夏十六日
小石龍謹題



① 象壁記

平安浦井氏所藏象壁彫盧生

夢因丹後小島形山生作生天資工雕
鑄自欲試其手眼之力因造此壁
袤一寸延加五分高如表為樓閣
十有四為人八百八十人為馬若象十二
匹為鹿一為樹八九株為禽四五十隻
驟視如蟻集腐葉諦視則種々可
辨云請余作之記余聞而不為信且
方校旧著外史未暇也乃今卒業取
而觀之盧生在榻美睡眉鬚宛然
枕辺忽露出儀衛前騎後從旗幟續
紛中擁彩輿四十夫昇之導以樂至
一大門々扁不老隸字為之波撒周到
門傍百吏拜迎陳列玉輅飾象左有
譙樓々門之際高設幔幕列果鼓
鐘門内三殿中者起閣道屬之門樓
其下又穿門人馬往來右者為長生
殿々側有浮囿喬木擁之殿後樓
閣重壘最後一巨閣兩層皆設帷座
擊珍玩列侍周旋者數十人閣左張
筵一伶方舞蘭陵王奮袖頓足鼓
者鉦者笛者笙者箏者環之曲
廡下觀者五十餘人閣右有堂兩階
懸燈群姬挾琴持花迎入曲房々
後園池位置樹石樓禽馴鹿房中
有梯攀而上樓書机瓶罇整然有
雅容數十展畫者聚首評者揮
毫者立題壁者捧研侍者樓又一層
有圍棋者傍觀者避而看書者倚
窓對話者又一層露台匝之列盆

② 花台後稍高處置潭潭儀風竿類

其前起雲梯如虹蜿蜒而上美人
導客至最高樓々左右又夾以露台
設椅眺遠裙帶縹緲台下構樓

各兩層相通而以一大樓受之上層

之左為詩筵隨几按書憑欄撥鬚
而虛其右下層之左佳人醉舞客吹
簫拍板而右數客彈琴飲酒如逃
喧者其間隔以重欄置珊瑚二盆
下至大樓則醉客裸杳杯盤狼藉
設桌三各環以椅開飲拇戰行酒
執爻極尺狀態而樓下即嚮舞
筵也曲廡上又有樓三層直雲梯
右梯左又起三樓則踞門内三殿
矣每樓有客々每數十其結構
有条理如此而窓眼斗拱欄楯柱礎
製作各殊摘必方瓦必凹瓦或雕龜若
龍介鱗眼爪皆備瓦際時有數雀
相顧啾噴一乳雀離巢而飛其瑣
屑不遺如此余眼不能觀以鑿鑿就明
曉之又聽生在側指說稍得弁之
曉信矣技之至於此也有客同觀咲
曰技雖妙哉得非無益乎何必以寸
許物備此種々而先生又為之記為余
曰不然余修外史做彼史漢國策叙
我鎌倉以來典廢之跡其事頗大
可謂有益也然以地球因按之亞細
亞諸國不能掌大至於我邦以指々
之蔽而不見比比此象壁更小矣而數
十英雄豪傑闢千軍萬馬山其
骨河其血以爭此指大之物當其得
志城闕連空宮宇障日姬妾驕

③ 從如雲如雨亦不過就指大中為之

而後世津談之屑叙之與形山
彫此奚異而余修史二十余年累
三十萬言而不能悉舉形山乃取
寸許物備此方象數閱寒暑即
畢其數乃爾不可以不記也且夫
世人之眩於功名富貴以功名富貴為

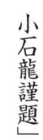
高且大不能眇視之也五十年將

相意氣籠蓋天下亦不過一夢籍
使非夢也自至人巨眼觀之如蟻集
腐葉耳是足以曉世矣形山之
雕焉浦井子之藏焉烏知其意
之不在於此哉何曰無益不可以不
記也於是乎記

文政十年歲在丁亥春仲月廿
又五日山陽外史賴襄撰并書
于鴨河草堂山紫水明處

形生之於刀戲離婁公輸併成一而山陽
翁以天下名手為之記叙事精密議論
縱橫實兼韓蘇之長可謂刀與筆
絕矣宜哉浦井主人寶愛不措也今也翁
逝七年生又得重寶在舊日刀則不知
此筆法不可後也亦能健健獨在筆者
刀者皆得親視則亦既老矣不可以
無題也乃書

天保九年季夏十八日
小石龍謹題



象墜記写本(田中家伝来本)
紙本墨書 本紙一〇・七×二八九・三

平安浦井氏所藏象墜彫盧
生夢圖丹後小島形山生作生
天濱工雕鑿自欲試其手眼
之力因造此墜、表一寸延
加五分高如表為樓閣十
有四為人八百十人為馬若
象十二匹為鹿一為楸八九
株為禽四五十隻驟視如蟻
集腐葉諦視則種之可辨
云清余心之記余聞而予為信
且方按舊著外史未暇也
乃今存業取而觀之官生
集腐葉耳 是足以曉世矣
殿山之雕寫浦井 予之藏焉
烏知其意之不在於此哉何
曰無益不可不記也於是乎記
文政十年 歲在丁亥春仲
廿五日山陽外史賴 襄撰
再書于島河草堂山紫
水明家

卷頭

卷末

象墜記写本(古河家伝来本)
紙本墨書 本紙一〇・六×二四三・三

平安浦井氏所藏
盧生夢圖丹後小島形
作生天濱工雕鑿自欲試其
手眼之力因造此墜、表一
寸延加五分高如表為樓
閣十有四為人八百十人為
馬若象十二匹為鹿一為楸
九株為禽四五十隻驟視如
蟻集腐葉諦視則種之可辨
云清余心之記余聞而予為信
且方按舊著外史未暇也
乃今存業取而觀之官生
然此遠近露出俄南前弱
菓耳 是足以曉世矣
殿山之雕寫浦井 予之藏焉
烏知其意之不在於此哉何
曰無益不可不記也於是乎記
是乎記
文政十年 歲在丁亥
秋仲廿五日山陽外史賴
襄撰再書于島河草
堂山紫水明家

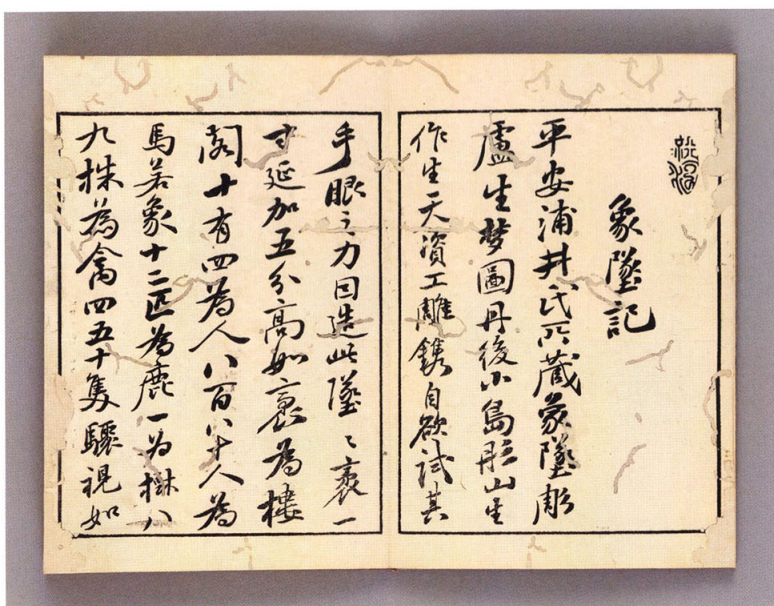
卷頭

卷末

象墜記 版本 明治三年版
表紙一八・〇×二二・一



表紙



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

珍品ものがたり

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 58

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成二十四年七月二十一日発行

© 2012, The Museum of the Imperial Collections